

【一】 次の各問に答えなさい。

問一 次の①～⑤の傍線部の漢字の読み方をひらがなで答えなさい。また、⑥～⑮の傍線部のカタカナを適切な漢字に直して答えなさい。

- | | |
|------------------------|-----------------|
| ① 早速部屋のかたづけをした。 | ② 安否を気づかう。 |
| ③ 彼は <u>筋金</u> 入りの闘士だ。 | ④ 真綿のようなやわらかさ。 |
| ⑤ 湖面が凍る。 | ⑥ 組織のキノウが低下する。 |
| ⑦ 問題はフクザツだ。 | ⑧ トウイツと分裂をくり返す。 |
| ⑨ 切手をシュウシュウする。 | ⑩ 各国のシュノウが話し合う。 |
| ⑪ 会社のギョウムをこなす。 | ⑫ 外国に大使をハケンする。 |
| ⑬ 生徒はきちんとセイレッツしなさい。 | ⑭ 空気がカワく。 |
| ⑮ 友情がメバえる。 | |

問二 次の⑯～⑳で説明されている慣用句について、空欄にあてはまる語を、それぞれ漢字一字で答えなさい。

- | |
|--|
| ⑯ 誰も好まず相手にしないことを「 <input type="text"/> 」も食わない」という。 |
| ⑰ 有名になることを「 <input type="text"/> 」が売れる」という。 |
| ⑱ 相手に遠慮せず思ったことを率直に言うことを「 <input type="text"/> 」に衣を着せぬ」という。 |
| ⑲ 外見も中身ともにすぐれていることを「花も <input type="text"/> もある」という。 |
| ⑳ すきにつけこみ失敗させることを「 <input type="text"/> をすくう」という。 |

【二】 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

「うまうま」とか「いやいや」とか、「おてて」とか、子供は母親から少しずつ言葉を教えられる。「お菓子をあげる」とか「お菓子をくださった」という言葉も耳にする。子供は「あげる」という言葉が敬意をこめた表現だとは、はじめのうちは気づかない。また、①「お菓子をくださった」といえば、その相手は自分より上の人なのだとも気づかないかもしれない。しかし、やがて子供は、「あげる」という言葉が、お餅を神棚ももちにあげるとか、荷を舟から陸にあげるとかにも使われることが分わかってくる。

「くださる」という言葉は、「A」と関係が深い。「A」とは、力あるもの、社会的な位置や、程度や価値の高いものを、力の弱い、価値の少ない、程度の悪いところへ、かまわず落下させることであり、上から下への力が強く、普通ではその力に抵抗できないことを指すと、子供はやがて分わかってくる。「命令をA」「おなかをA」という表現も、その本来の意味によることだと分わかるようになる。

そして、「B」は、意識的に、下につくまで注意を保って運ぶこと、従って「重荷をB」と使うこと。また、「おとす」は、高い所にあるはずの物を、手放して、それが下についた結果、どうなるかと構わないときに使う言葉だということも、次第に区別できるようになる。

人に物を与え、渡すことを敬意をこめて言うには、日本語では、物を上にあげ、下にくくださるという言葉を使う。それは日本人の社会の構造が、^②絶えず上下関係に深い注意を払う社会である結果である。子供はそれを、アゲル、クダサルという言葉とともに、知らず知らずのうちに理解する。子供は自分で言葉を作ることまれも、稀にあるが、それよりも、すでに出来ていて、大人によって受けつがれて来た言葉の体系を教え込まれ、その言葉全体のワクの中に入れられて、それが使いこなせるようにと仕向けられる。その結果、子供は

*1 たいけい

その単語や文法のワクに従って、自然界や、人間界の、あらゆる物事を区別し、判断するようになる。

この言葉のワクは、どの国でも同じというわけではない。例えば、日本語では、「子供が申しますには……」と「子供が言いますには……」とで、はっきり違う。「子供が申しますには……」という言葉から、人々は、母親が先生と話している場面を想像する。

「子供が言いますには……」と母親が先生と話しているなら、その母親は言葉に対する心づかいが細かくないということになる。しかし、この「申す」と「言う」の相違にびつ

たりあたる言い方を、英語・ドイツ語に求めても、それを引き出すことはできない。英語

・ドイツ語には、日本語にあるこの区別が無く、「申す」も「言う」も一つの単語で表現する。それは、英語・ドイツ語の社会に「申す」と「言う」にあたる観念の区別がないからである。

もちろん、日本語の方がいつも言葉の数が多く、ヨーロッパ語の方がいつも少ないというのではない。ヨーロッパ語にあつて、日本語に欠けている言葉もある。例えば、英語には、「自然」という言葉がある。ネイチュア nature がそれである。このネイチュアにあたる言葉は、日本語では「自然」という他、何も言いようがない。中国語やヨーロッパ語から借り入れたものではない、もともとの日本語をヤマト言葉と呼ばば、ヤマト言葉に

「自然」を求めても、それは見当らない。何故、ヤマト言葉に「自然」が発見できないのか。

それは、古代の日本人が、「自然」を人間に対立する一つの物として、

C と

して捉えていなかったからであろうと思う。自分に対立する一つの物として、意識のうちに確立していなかった「自然」が、一つの名前を持たずに終ったのは当然ではなからうか。

「申す」と「言う」の観念の区別がない所では、その言葉の区別がない。「自然」が一つ

の C として確立されなければ、そこにはその名前がない。

「自然」が「人間」に対立する一つの物として捉えられなかったのは、日本民族においては、深い遠い由来^aを持つ事柄である。だから、「自然」という中国語を学んだ後でも、長い間、日本人は「自然」を一つの物と見る考え方を身につけずに来た。それは、単に遠い歴史の時代だけでなく、現代の日本人の間でも、根強いことのように見える。

(中 略)

いつも自然と共にあること、これが日本人の自然に対する対し方である。自然と共にいるというよりも、「自然」と溶け合い、「自然」に対して自と他という、はっきりした区別を持たない。

若いうちには、いろいろな活動をした人でも、日本人は年をとると、山の麓の静かな所に小屋を建て、そこにひっそりと生きたいと願う人が少なくない。人々はそれを、よいことのように思う。「隠棲する」という言葉がある。人間が、自然の風景——大きな林、水の流れ、広々とした草原、そこに立つ一本の大樹——その中に自分を持って行き、その自然の一つの風物となつて生きること、それが隠棲である。それは日本人が「自然」と「人生」に対して持つ、根深いところざしの一つの姿であると言えるように思う。

これには、他のさまざまな原因もある。しかし私は、これを、言葉の問題に引きつけて考えている。日本語のヤマト言葉に「自然」という単語がないこと。日本人が自然を利用の C と見ず、自然と人間との間を明瞭に分けずに、融け合おうとすること。

④ それら二千年前のあり方が、長い歴史の時代を通じて日本人の間に生きており、今日も依然として尾を引いて、そのような姿をとって現われるもののように私は見る。

注 *1 体系……一定のきまりでまとまっているもの。

*2 ヤマト言葉……古代に中国から入ってきた言葉ではなく、日本古来の言葉。

(大野晋『日本語の年輪』)

問一 問題文中の傍線部 a 「由来」・ b 「明瞭」の語の意味として最も適切なものを、次の選択肢からそれぞれ一つずつ選び記号で答えなさい。

a 「由来」

ア あるものがなにかの役に立つ証拠。
ウ 物事が今までにたどってきた筋道。

イ 人間が自然を大事にする真の目的。

エ あるものが存在しなくなった理由。

b 「明瞭」

ア 物事にしっかりと取り組むこと。
ウ バランスがよくとれていること。

イ はっきりしていてあきらかなこと。

エ 考え方がするどくてかしこいこと。

問二 問題文中の空欄 A・B にあてはまる語を、それぞれひらがな三字で書きなさい。

問三 問題文中の空欄 C にあてはまる「たいしよう」と読む二字の熟語を書きなさい。

問四 問題文中の傍線部①「『お菓子をくださった』といえば、その相手は自分より上の人なのだ」とあるが、それはなぜか。それを説明するための次の文の空欄にあてはまる内容を二十字以内で書き、文を完成させなさい。

「くださる」とは、「」 「」ことに敬意をこめた表現だから。

問五 問題文中の傍線部②「絶えず上下関係に深い注意を払う」とあるが、その具体例として最も適切なものを、次の選択肢から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 中学生が電車内で高齢者の足を踏んだところ、すぐに「すみません」と謝った。
イ 中学生が登校途中に校長先生に会ったので、中学生のほうからあいさつをした。
ウ 中学生の男の子が、松葉杖をついた小学生の女の子に、バスの座席をゆずった。
エ 中学生の太郎君は、初対面の同級生に対して、敬語で会話することになっている。

問六

問題文中の傍線部③「『申す』と『言う』の相違にぴったりあたる言い方を、英語・ドイツ語に求めても、それを引き出すことはできない」とあるが、それによって言葉についてどういうことが理解できるのか。それを説明するための次の文の空欄にあてはまる内容を、問題文中から二十五字以内で抜き出し、文を完成させなさい。

その言葉を使う人々（国、共同体）によって、「」
「体系がちがう」ということ。

問七

問題文中の傍線部④「それら二千年前のあり方が、長い歴史の時代を通じて日本人の間に生きており、今日も依然として尾を引いて、そのような姿をとって現われる」とはどういうことか。「ヤマト言葉」「一体化」「隠棲の思想」の三語を必ず用いて説明しなさい。

問八

問題文で筆者が述べようとしていることはどういうことか。最も適切なものを、次の選択肢から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 相手との関係によって「申す」と「言う」のどちらを使用するかを決定する日本語という言葉は、他の国の言葉にはあるのにそれにあたる日本語がないことが多く、その意味で特異な言葉である。

イ 子供はおもに母親から言葉を学習することによって、社会に目を開いてゆくのだが、やがて年をとると人間社会から離れて、自然の中で隠棲するようになり、言葉から遠ざかってしまうのである。

ウ 日本語に「申す」と「言う」という言葉の相違に見られる、外国語にはない日本語独自の敬語があるように、言葉とは、それを使う国（社会）の人々のもののとらえ方や考え方と密接な関係がある。

エ 言葉のワクにしたがって生きていくようにと、日本人は子供に教えこむのだが、子供は自ら新しい言葉をどんどん作り出すので、言葉どうしの観念の区別が外国語と異なってしまうようになった。

【三】 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

太平洋戦争が始まったころの秋の夕方、ある画家の家に、画家の中学時代からの友人二人が訪ねて来た。画家の妻が食後に紅茶と「くるみ」を客たちに出したことがきっかけとなり、画家は、みずからの少年時代について語り始める。

画家（以下問題文中では「ぼく」）が小学校三年生の時、彼の母が病気で寝たきりになった。入院先の逗子では、桂さんという母の親せきの女性が看病してくれた。「ぼく」は時々、父と姉と逗子に見舞いに出かけたが、そんな時、母は家族と別れるのがつらそうだった。母が逗子から東京の家にもどると、それまで仕事人間だった父も、熱心に看病をした。やがて「ぼく」は六年生になり、中学入試の受験勉強に取り組み始める。この日も学校での補習で、帰宅は遅くなった。

この二、三日、母の容体のおもしろくないことは知っていたので、靴を脱ぎながら、ぼくは気になった。着物に着替え顔を洗って、電気のついた茶の間へ行くと、食事の支度としてある食卓のわきに、編み物をしながら、姉はぼくを待っていた。ぼくはおやつをすぐにほおばりながら聞いた。

「ただいま。——お医者さん、今日は二人？」

「ええ、昨夜からお悪いのよ。」

いつもおなかを減らして帰ってくるので、姉はすぐ御飯をよそってくれた。

父と三人で食卓を囲むことは、そのころほとんどなかった。むしろむしろ食べたばかりに、姉はしを取りながら、

「節ちゃん、お父様がね。」と言う。「あさつての遠足ね、このぶんだとやめてもらうかもしれないって、おっしゃっててよ。」

遠足というのは、六年生だけで一晩泊まりで、日光へ行くことになっていた。

「ちえっ。」

ぼくは乱暴にそう言うと、茶わんを姉に突き出した。

「節ちゃんには、ほんとにすまないけど、もしものがあつたら。——お母さん、とてもお悪いのよ。」

「知らない！」

姉は涙ぐんでいる様子であった。それもつらくて、それきり黙り続けて夕飯をかき込んだ。

「おふろ、すぐ入る？ それとも、勉強が済んでから？」

姉には答えず、ふっとして座を立った。母が悪いということ、母が死ぬかもしれぬということは、ぼくの心で一つにはならなかった。

生まれて初めて、級友と一泊旅行に出るということが、少年にとってどんなに魅力をもっているか！ 級のだれかれとの約束や計画が、鮮やかに浮かんでくる。両の目に、涙がいつぱいあふれてきた。

父の書斎の扉が半ば開いたまま、廊下へ灯がもれている。そこを通過して、突き当たりの階段を上がると、ぼくの勉強部屋があるのだが、ちょうどその階段を、物干しへ行つただけかが下りてくる様子なので、泣き顔を見られるのがいやさに、人気のない父の書斎へ、ぼくは入ってしまった。

いつも父の座る大ぶりないす。そして、ひょいっと見ると、卓の上には、くるみを盛った皿が置いてある。くるみの味などは、子供に縁のないものだ。いらいらした気持ちであった。

どすると、そのいすへ身を投げ込むと、ぼくはくるみを一つ取った。そして、冷たいナットクラッカーへ挟んで、片手でハンドルを押した。小さな手のひらへ、かろうじて納まったハンドルは、くるみの固い殻の上をぐりぐりとこするだけで、手ごたえはない。「どうしても割ってやる。」そんな気持ちで、ぼくはさらに右手の上を左手で包み、ひざの上で全身の力をこめた。しかし、級の中でも小柄で、きやしゃな自分の力では、びくともしない。

左手の下で握りしめた右の手のひらの皮が、少しむけて、ひりひりする。ぼくはかんしやくを起こして、ナットクラッカーを卓の上へほうり出した。クラッカーはくるみの皿に激しく当たって、皿は割れた。くるみが三つ四つ、卓から床へ落ちた。

そうするつもりは、さらになかったのだ。はっとして、いすを立った。

ぼくは二階へ駆け上がり、勉強机にもたれて一人で泣いた。その晩は、母の病室へも見舞いに行かずにしまった。

しかし、幸いなことには、母の病気は翌日から小康を得て、ぼくは日光へ遠足に行くこ

とができた。

ふすまをはらった宿屋の大広間に、ずらりと布団を敷き連ねたその夜は、実ににぎやかだった。果てしなくはしゃぐ子供たちの上の電灯は八時ごろに消されたが、それでも、なかなか騒ぎはしずまらなかった。

I
いつまでもぼくは寝つかれず、東京の家のことが思われてならなかった。安らかな友達の寝息が耳につき、覆いをした母の部屋の電灯が、まざまざと目に浮かんできたりした。
② ぼくは、ひそかに自分の性質を反省した。この反省は、ぼくの生涯の最初のものであった。

とろりとしたと思うと、もう起きだす子があつて、翌朝は早かった。

*7
母には焼き絵の小箱を、姉には焼き絵の糸巻きを土産に買ったが、その小箱と糸巻きは、それから忘れるほど永い間、ぼくの家のどこかしらに残っていた。姉がそれへ、たつぷりと巻いた、紅や鬱金の糸の色を、ぼくはいつまでも忘れないだろう。

静まり返った家の中で、ぼくの試験勉強は再び続いた。

III
夜ふけて、廊下を通ると、父の部屋からくる音を割る音がよく聞かれた。看護の暇々に、父は書齋で読書をしながら、くるみをつまむのが癖になったようである。

今、こうして、ぼくが紅茶を自分でいれ、ブランデーで体を温めるのも、実はそのころの父のまねをしてみているのだ。看護に疲れたときの憩い^{いこ}の方法として、父はだれかに勧められたものかもしれない。

夜ふけの廊下で、その音を聞くと、ぼくはその当座、びくりとしたものだ。皿を割ったことについて、父がひとことも言わないだけに、いつそうぼくは具合が悪かった。

——そして、再びぼくはくるみを割ってみようとはしなかった。ぼくには永久に割ることのできない堅さ^{かた}と思われたから。

年が改まって、ぼくは二つの中学の入学試験を受けた。(第一志望の学校を落ちた場合のために、そうするのが、そのころの習慣であった。)母は、試験が終わって間もなく、

A
の客となった。

ぼくは第一志望の試験にパスして、君たちと友達になった。新しい世界へ飛び込んだ喜びは強く、ぼくはすぐに不幸を忘れた。いつまでも消毒剤^{しょうどくざい}のおいの消えない、きちんと片づいてしまった、亡い母の病室へ入ったときのほかは——。

父と姉とぼくとの生活が始まった。父は、病む母へ向けた慈愛^{じあい}を、そして、母への追慕^{しゅうぼ}

の情を、二人の上に惜しみなく注いだ。年ごろの姉が、ばあやを指揮して、いちおう家の中に新しい光がさすようになると、父の勤めは旧に復して、旅行にも出るようになった。姉の思いやりもあつて、亡い人への追慕を、父は仕事と旅に紛らせた。

母の死後、半年ほどすると、姉に縁談が起こった。姉も好意をもっていた人で、話はすぐ決まり、挙式^{きよけしき}は一周忌が済んでから、ということになった。

③ 自分の姉でしかなかった姉を、ぼくは改まった気持ちで見直すのであった。兄となるべき人も、家へ遊びに来るようになって、三度に一度は、ぼくを加えた三人で、郊外^{こうがい}へ散歩に行ったり、映画を見に出かけたりすることもあった。その人と二人でいるときは、ぼくはその人に好意をもったが、姉が加わると、心の底にきつとわいてくる悲しさに似た感情を、ぼくはどうにもできずにいた。

嫁入り道具が、日増しにそろっていった。

V
姉が一時に大人びて映り、まぶしく見えることもあった。まぶしさが、別離^{べつり}の日の悲しみや、父と共にこの家に取り残される寂しさに変わって、激しく胸を打たれる日もあった。ある日曜日の午後であつたと思う。ぼくは姉と親戚^{きんせき}へ行つた。その帰り道に、姉が何気ないふう^{ふう}に言った。

「節ちゃん、あたしがいなくなっても、寂しくない？」

「——」

ぼくは黙っていた。

「お父様だって、お困りになるわね。」

しばらく間を置いて、姉は思いついたように、言葉が続けた。

「あたし、節ちゃんに相談があるの。—— 鵜沼^{ういぬま}の、桂おば様、ね、知ってるでしょう？」

「知ってるよ。」

突然のことで、姉が何を言おうとするのか、ぼくにはわからなかった。桂おば様というのは、死んだ母の遠縁に当たる、母より三つ四つ若い、美しい人であった。前にも言ったが、母が逗子で療養しているころ、付ききりに看護をしてくれた人だ。結婚して二年ほどで夫に死に別れた、ということは、そのころから聞いていた。

「桂さんに、—— あたしの代わりに、うちへ来ていただいたらと思ったの。お父様に話したら、節雄^{せつお}がよければ、つておっしゃるのよ。」

どきんとした。みんな、自分をかわいがってくれる人は行ってしまったて、お体裁に、代わりの人を置いてゆこうとしている。——そんな気もした。

「ぼく、いやだ。」

そういえば、桂さんはこのごろ、二、三度家へ遊びに来ている。自分には何も言わず、みんなでそんなことを進行させていたにちがいない。——そんなふうにも想像した。

「このこと、あんまり突然だから、あなたにはのみ込めないかもしれないけど、あたしがお嫁に行ってしまったら、お父様だつてずいぶんお困りになるし……。」

「お父様は、勝手に旅行してればいいさ。」

ぼくはすげなく言い切った。姉は寂しそうに、そのまま黙った。

一周忌が近づくにつれ、姉の支度や親戚の出入りで、父も忙しそうであつた。だれかしら人が来ていて、家はにぎやかだつた。

「お母さんも、きつと喜んでいらつしやいますわ。」

人々は、申し合わせたようにそう言った。

晴れやかな姉の笑い声を聞くと、ぼくはたった一人の姉を奪われる感じを、最も激しく味わった。

「姉弟なんて、つまらないもんだね。」

二、三の友達に、ぼくはませたことを言ってみたりした。

「そうさ、兄弟は B の始まり、っていうもの。」

そんなことを教えてくれる友達があつた。

あれ以来、ひょいっと、桂さんのことを思い出すようになった。桂さんは、もの静かな、にこやかな人で、桂さんについて、ぼくはなんの悪意ももっているのではなかった。

一周忌の前夜、坊さんが来て経をあげた。親戚の人が帰ってしまうと、父の書齋に、親子三人が久しぶりに卓を囲んでいた。

父が、姉に言った。

「どうだ、あの着物、気に入ったか。」

「とても。——すばらしいわ。」

「ふうん。」

父はにこにこした。先日旅行に出たとき、京都で注文したのが、今朝届いてきたのだ。

「節雄、その戸棚からブランデーを取ってくれ。——信子はくるみを。」

ぼくはこれと同じの細長い瓶を、そして姉はくるみを、卓の上に置いた。

「一年なんて、たつてしまえば早いもんだ。——お父さんも、もう旅行をしないで済むように、会社へ頼んできた。これで、お姉さんが嫁に行くと、また当分、ちよつと寂しいな。」

父が、優しくぼくに言った。父の顔が、老けて見えた。姉はブランデーをついだ。

「しかし、すぐまた慣れるさ。」

父は、グラスを口に含んだ。

どうしたはずみか、桂さんの面影が、そのときぼくの目に浮かんできた。ぼくはちよつと慌てた。そして困って、くるみを一つつまむと、クラッカーに挟んで片手で握りしめた。すると、カチンと、快い音がして、くるみは二つにきれいに割れた。

思いがけない、胸のすくような感触であつた。

そのとき、ぼくは言った。

⑤「お父さん、ぼく、桂さんにうちへ来てもらいたいんだけど……。」

(永井龍男『くるみ割り』)

注 *1 容体のおもしろくない……病気の状態があまりよくない。

*2 日光……栃木県の地名。

*3 書齋……読書したりものを書いたりする部屋。

*4 ナットクラッカー……くるみの固い殻を割る道具。

*5 さらになかった……まったくなかった。

*6 行かずにしまった……行かないで終わってしまった。

*7 焼き絵……火で焼いたこてなどで、紙や木に絵や模様を焼いて表したもの。

*8 紅や鬱金……紫がかった濃い赤色と、鮮やかな黄色。

*9 追慕の情……死んだ人を思い出してなつかしむ気持ち。

*10 旧に復して……もとの状態にもどって。

*11 一周忌……亡くなった日から一年目にとりおこなう儀式。

*12 親戚へ行った……親戚の家に出かけた。

*13 鵜沼……神奈川県の名。

*14 すげなく……ぶあいそうに。そっけなく。

問一 問題文中の傍線部 a 「きやしや」・ b 「お体裁」の語の意味として最も適切なものを、次の選択肢からそれぞれ一つずつ選び記号で答えなさい。

a 「きやしや」

ア 外見とはかけ離れていて意外なこと。 イ がんじようではなく弱々しいこと。
ウ 意志の力ではどうにもならないこと。 エ 骨が折れそうなくらいつらいこと。

b 「お体裁」

ア 見かけだけ変わらぬよう取り繕うこと。 イ ずっと一人前に扱われないこと。
ウ 他人どうしがお互いに心配しあうこと。 エ 間違いを何度でもくり返すこと。

問二 問題文中の空欄 A にあてはまる語を、次の選択肢から一つ選び記号で答えなさい。

ア 不帰 イ 不治 ウ 不服 エ 不動 オ 不明

問三 問題文中の空欄 B にあてはまる語を、二字の熟語で書きなさい。

問四 問題文中の傍線部①「られる」と文法的に同じ意味・用法の語を、問題文中の傍線部Ⅰ～Ⅴからすべて選び記号で答えなさい。(一つとは限らない)

Ⅰ 「寝つかれず」の「れ」

Ⅱ 「思われて」の「れ」

Ⅲ 「聞かれた」の「れ」

Ⅳ 「勧められた」の「られ」

Ⅴ 「取り残される」の「れる」

問五 問題文中の傍線部②「ぼくは、ひそかに自分の性質を反省した」とあるが、これはどういふことなのか。次の選択肢から最も適切なものを一つ選び記号で答えなさい。

ア 母の病室にお見舞いに行くこともなく、すぐさま遠足に出かけてしまったことに
対して、母に申し訳ない気持ちさがこみあげてくるという、気持ちのやさしい性質
を反省した。

イ とても行きたがつっていた遠足なのに、いざ行ってみると母の病気のことが心配になり、友達と思いきり楽しめないという、何事にも中途半端になってしまう性質を反省した。

ウ いつの間にか母の病氣と死とを結びつけて考えることをしなくなり、母の元気な様子から、遠足に行っても平気だろうと考えてしまうという、おどろばな性質を反省した。

エ 実際に遠足に來てみると、友達とはしゃぐよりも母のことが心配され、母の病狀が悪いのに遠足に行きたいと姉にあたり、かんしゃくを起こした自分勝手な性質を反省した。

問六 問題文中の傍線部③「ぼくは改まった気持ちで見直すのであった」とあるが、それはどういふことか。それを説明するための次の文の空欄に三十字以内で書きなさい。

「ぼく」は姉をたんなるきようだいとしてではなく、「」。

問七 問題文中の傍線部④「カチンと、快い音がして、くるみは二つにきれいに割れた」について、くるみはどのような時には割れなくて、どのような時には割れたのか。具体的にくわしく説明しなさい。

問八 問題文中の傍線部⑤「お父さん、ぼく、桂さんにうちへ来てもらいたいんだけど…」とは、「ぼく」のどのような気持ちを表しているか。簡潔に説明しなさい。